

【第2回滋賀県立高等学校在り方検討委員会 開催概要】

■開催日時

令和8年3月30日（月）9時30分～11時30分

■開催場所

滋賀県庁 東館7階 大会議室

■出席者

会場出席委員 13名 原委員長、朝比奈委員、加藤委員、門田委員、蒲生委員、岸田委員、炭谷委員、中井委員、中野委員、藤田委員、森下委員、安田委員、吉嶋委員

オンライン出席 2名 生駒委員、永浜委員

滋賀県教育委員会 村井 教育長、上田 教育次長、北川 教育次長、岸村 高校教育課長、浅岡 魅力ある高校づくり推進室長

関係課 教育委員会事務局各課、知事部局関係課

■傍聴者数

10名



■開催概要

(1)協議「高等学校教育の役割について」

<委員からの主な意見>

- これからの高等学校は単なる知識習得の場にとどまらず、予測困難な社会を生き抜くための自立する力や他者と協働する力を育む場であると同時に、多感な時期の生徒たちが、失敗を恐れずに挑戦できる安心できる居場所をつくることが何より重要。
- 県立高校が果たすべき最大の役割は、学びのセーフティーネット。
- 経済状況や家庭環境、障害の有無に関わらず、全ての子どもたちを包摂できる公教育の責任が改めて問われている。
- 県内全域において、等しく質の高い教育機会を保障するという地理的な役割も県立高校ならではの重要な役割。

- 多様な背景や困り事を抱える生徒たちが、同じ空間でともに学ぶ環境そのものがこれからの共存社会、共生社会を生き抜くための土台になる。
- 私立高校は、それぞれの建学の精神のもとに、特定の分野に特化したカリキュラムや手厚いサポートなど、多様化するニーズに応えることができる特色ある教育の選択肢を提供するというのが役割ではないか。
- 本県においては、県立と私学は機能分担と協働の関係へとシフトさせるべき。例えば、合同で滋賀県の地域課題解決プロジェクトに取り組むなど、県全体の教育力を底上げするパートナーとしての関係を築くことこそが、滋賀県における理想的な高等教育のあり方だと考える。
- 公立高校のあり方として、どの地域のどの学力の子どもの経済状況の子ども、特に一般教養の科目をしっかりと学べる環境が必要。
- 今の滋賀県の方向性を見ていると、特色を出すということを強く打ち出されてるとは思うが、これは、ともすれば子どもたちの道を狭めることにもなりかねないのではないかと懸念も少しある。
- 特色化を進めていくことで、入ってから「自分には合わなかった」「無理だな」となる子どもたちが出てくることを考えると、入学後に子どもたちが柔軟に進路を選べる、専門科の学校に入ったとしても、就職もできるし、大学受験もできるようなカリキュラムをしっかりと各地域で揃えていくことが必要だと思う。
- 親御さんも含めて、学びが専門化しすぎると、ちょっと避ける傾向があると思う。
- もう一度、普通科のあり方を見直すべきではないか。
- 高校は、子どもから大人になるための橋渡しとなるととても重要な場所。
- 公立高校は、学校ごとに、進学するか、就職するかという色が結構残っている。中3段階で、将来に繋がる判断をするのは本当に難しいこと。
- 私立は進学を目指すコースや就職を目指すコースとかがあがるが、公立高校は学校ごとに色分けがあり、人によっては、そのことで選ぶ幅が狭まっていると感じる人もいるのではないかと。バランスのとれた学習ができる高校があれば、高校のうちに将来について考えることがよりできるのではないかと。
- 国の政策においては、特定の部分にこそ長けた人材を作るという方向性が高等学校に求められている。どこかの学校はバランスのある学校、どこかの学校はある意味尖った、専攻に特化する学校があってもいいと思う。
- 県立学校は学びを保障するというのが一番大事。
- 高校は、子どもたちがいろんな人間関係を形成していく上で、大事な役割を担っている。
- 今年の入学状況において、定員が充足していないところがあった。だからと言って、規模縮小をしていくということはどうなのかと思っている。
- 北の方から南の方に高校の進学が流れている。そのため、あまり生徒が集まらない学校のあり方をどうするのかということは議論にはなってくると思うが、子どもたちの社会にでる一歩手前の大事な場という観点で、学校の在り方を考えていかなければならない。
- 学校教育法では、小学校の目的は基礎的な普通教育を施す、中学校は普通教育を施す、という表現が出ている。高校教育は、心身の発達、進路に応じて高度な普通教育および専門教育を施

す、ということで、義務教育と差別化、明確に違う文言が使われている。加えて、社会において果たさなければいけない使命の自覚、健全な批判力、といった文言が使われている。

- 今後の議論の枠組みとして、高度な普通教育、専門教育となったときに、普通科における専門教育とは、また、専門教育をしている学校、商業高校や工業高校における高度の普通教育とは何なのか、という議論も必要ではないか。
- 前回探究学習の話が出たが、普通科における探究とか、専門学科における探究ということも考える必要があると思う。
- キーワードとして、「余白」の大事さ。探究活動の中で「余白」があるかどうか、学びの中に「余白」があるということが大事だと思う。
- 私立高校には建学の精神が根っこにあり、それを体現する人を育てるカリキュラムを実施していると認識している。一方で、公立高校は、良い意味でそれがない。私立のような建学の精神なるものはない。高校3年間の中で、生徒自身が自分自身の価値体系を作っていく、進路のことを考える、自らの人生を舵取りする力をつくる。公立高校の特色はここではないかと思う。
- どんな学校がどんな魅力を出していくか、選択と集中をしていく。公立ならではの「余白」の作り方、勉強の仕方を考えていくのが大事だと思う。
- 高校の普通科をどうするのか、専門学科をどう生かしていくのか、ということについては、どこの府県でもいろいろと議論になっているところ。
- キーワードとして、「オールインワン」の学校と「シンボリック」な学校、両方必要ではないかと思う。入ってからいろいろ考えながら可能性を探していける学校も、本県教育を引っ張っていくシンボリックな学校、それぞれ作っていく必要がある。広く薄くという発想ではなくて、オールインワンはオールインワンの在り方、シンボリックな学校はシンボリックのあり方を突き詰めていく、そのことが必要ではないかと思う。
- 定員未充足の状況を見ると、やはり地域によって偏在している。学校の特色づくりは、地域バランスを踏まえた検討が必要になるのではないか。

(2)協議「本県の産業教育の在り方について」

<委員からの主な意見>

- どういう魅力ある高校生を育みたいのか、という視点に立つことが非常に大事。
- 産業界からすると、普通科でも専門高校でも、近江商人三方よし、SDGsをベースとして、産業界と連携しながら、指導するということが大事なこと。
- 産業界と実学レベルで、滋賀県らしさのあるカリキュラムを作っていく。
- これからは、AI利用と外国人との共生社会。
- 国際的に戦っていける人材を出していかないといけない。
- コミュニケーションできる力を育てていく。
- 体験量、経験価値をつむ場の提供。座学だけでなく実体験の経験価値をつくっていかないといけない。
- 生徒が減って、空き教室がふえていくことをポジティブにとらえて、空き教室の活用方策として、企業のシェアオフィスを設置するなど考えてはどうか。
- 学校に、企業との連携を進めるコーディネーターを置き、高校教育に関心の高い地元の中小企業といつでも相談できる環境をつくる。出前授業にとどまらず、コーディネーターが伴走して広報までやっていってはどうか。
- 産業界が求める人材養成が高校でどの程度できているか、疑問に感じている。産業界が、どのような人材を求めておられるのかを把握しておく必要がある。
- 高専と工業高校のすみわけをしっかりと考える必要がある。それに応じて、どういう形で進路指導をしていくか。
- 出口の多様化ということだけでなく、しっかりと進路指導をしていく方がよいと思う。
- コミュニティスクールの関係で、いろいろとコーディネーターを通じて、地域とつながっていく取組がこれから進んでいくのではないか。
- 学校と産業界のマッチングをいかに図っていくかがとても重要。
- 地元企業からは、なかなか高校を卒業した地元の子が就職に来てくれないという話を聞いた。PRをしているが、うまくマッチングしていかないということがある。
- 高校生の就職を産業教育においては重要視していく必要があるのではないか。
- 専門的な学びの出口として、どういうところに就職できるか高校生に知ってもらいたい。
- 専門的な知識があると、進路もひろがることもある。
- いろいろな働き方があることを知って、そうした働き方をしている人たちと交流できる機会があるとよい。
- 生きる力は、働くというところでも非常に大事になってくる。
- 専門的なこと、ベースになる部分がこれからより大事になってくる。
- 大学生が高校教育の現場に入ることがプラスになる。そういった経験は相乗効果を生む。
- 大学側も発想を変えていく時期に来ている。
- アルバイトは社会につながる点でいいと思う。働く時間の上限を設けたり、成績の条件を付けるなどして、アルバイトを推奨していくことを提案したい。

- 高校生は、民間企業・産業界を知らないと思う。産業界からしても、大学生はインターンシップで受け入れているが、高校生とは疎遠、距離感がある。距離感を近くするという意味では、アルバイトもいいし、インターンシップなどの機会をつくって、単位を与える工夫をしてもいいのではないか。
- 短期のインターンシップだけでなく、長期の、6カ月くらいのインターンシップを実施してはどうか。実践的な学びになる。

(3)協議「支援・配慮を必要とする、一人ひとりに寄り添った学びの在り方について」

<委員からの主な意見>

- 滋賀県内の外国籍生徒が増えている。また、小学校中学校のときに不登校で学校になかなか来れなかった生徒や、別室で特別な支援を受けたり、いろいろな配慮を受けながら中学校を卒業する子どもたちが年々増えてきている。
- 生徒一人ひとりの学びの場の保障、たとえドロップアウトしたとしても、途中からでも子どもたちの進路が保障できることをこれからも大事にしてほしい。
- 県全体として、子どもたちへのきめ細やかな配慮を重要視してもらいたい。
- 不登校や引きこもりの生徒に対して、どのような形でもよいので、「つながる」ことがすごく大事。
- 基礎学力の定着であったり、柔軟な単位取得の仕組み、機会を逸することなく、いつでも学びなおすことができる仕組みづくりも大切。
- 大津清陵高校の取組実績・ノウハウをしっかりと生かすことが大事。
- 教育ニーズを調査したうえで、大津清陵高校のような学校が、各地域にあってもいいのではないか。
- 今後、高校の再編・統廃合を検討されるのであれば、空き教室などのスペースをうまく活用して、小規模多機能型の学校を各地域に作ることも検討してはどうか。
- 一人ひとりに寄り添った学びの場づくりは、公立だからこそやるべきだし、できるのではないかと考えている。
- 中学校で支援が必要だった子が、高校に入ると通常学級になる。そのことの議論も必要ではないか。
- 高校進学後の生徒がどうしているのか、中学校はほとんど知らない。情報がない。公立高校の在り方を考えるこの機会に、議論したい。
- 特別な配慮や支援が必要な生徒が増えており、先生方のスキルやマインドが非常に重要になってきている。
- 特別支援学校では、1年生の時からかなり地域と連携してインターンシップのようなことを行っている。生徒のことを知っていただいたうえで、受け入れていただく流れを作っている。子どもたちは卒業すると地域に帰っていくので、地域とつながるという視点が非常に大事。
- 小さいころから支援学校に行っていると、地域とつながらずにきて、卒業後いきなり露になる。高等部を卒業した後、地域の中でどう認識されてつながりを持っていくのか、地域の中でどう暮らしていくのかも課題となっている。
- 高校生が、地域の中で参画する場を作ることが大事だと思う。講座とか意見発表というだけではダメでいかに実行するか。まちづくりに参加する、地域とつながっていくか。

(4)部会の設置について

- ・ 委員会のもとに、3つの部会を設ける。
 - 「(仮) 普通科高校等における人材育成検討部会」
 - 「(仮) 専門高校等における人材育成検討部会」
 - 「(仮) 一人ひとりの多様な学習ニーズ対応検討部会」
- ・ それぞれの部会の人数としては5～7名程度とし、委員には入っていない県立高等学校の管理職の先生等にも入ってもらうよう、改めて調整する。
- ・ 部会は、オンラインで開催する。

(5)次回開催日程について

- ・ 第3回の開催日程については、5月ないし6月で開催を検討。
- ・ 具体の日程については改めて調整する。